

佳作

## あく手

福岡県 福岡教育大学附属福岡小学校二年 松田 晟生

とつぜん、ひいおじいちゃんが、入いんしました。としをとって、心ぞうがよわくなってきたそうです。

ひいおじいちゃんの家は、ぼくの家からはなれていたので、一年に一どくらいしか、会えませんでした。

でも、ぼくの家近くのびょういんへ入いんしたので、まい日、会えるようになりました。

ひいおじいちゃんは耳がきこえにくみたいですが、ぼくが大きな声で、話しかけても、まったく通じません。ただ、わらうだけです。でも、おかあさんとは会話をします。ぼくは、くやしくなって、ひいおじいちゃんの耳元で、何回も大きな声を出して、話しかけました。ひいおじいちゃんは、耳をいたそうにして、少し顔をしかめてから、いつものようにわらいました。そして、かた耳に、テレビのイヤホン

をさしこんで、野きゆうか、すもうのつづきを見はじめます。

ひいおじいちゃんは、ぼくがお見まいに來なくても、何ともないんじゃないかとだんだん思えてきました。何をしに來ているのか、分からなくなりました。

ぼくだって、しゆくだいがあるし、やりたいこともあるのに、こうやって会いに來てやっているのに。むねの中がもやもやしました。

いつもは、びょういんから歸る時、「またね」と言いながら、ひいおじいちゃんとあく手をしてから歸ります。でも、テレビの方を向いて、ぼくの方を見ようとしてもしない、ひいおじいちゃんに、何も言わずに歸ってしまったことがあります。

次の日、お見まいに行くと、ひいおじいちゃんから、

「いつの間に歸ったか、分からなかったばい。びつくりしたよ。」

と心ぱいそうに、話しかけてきました。

ひいおじいちゃんは、とつぜんいなくなつたぼくをさがして、びょういんの一かいまで下りて、歩きまわっていたそうです。その話を聞いて、ぼくは、

ひいおじいちゃんに心ばいをかけて、何てひどいことをしたんだろうと思いましたが。ぼくの声は、ひいおじいちゃんに聞こえなくても、ぼくとひいおじいちゃんは、あく手で会話をしていたんだと気がつきました。

たいいんの日、ひいおじいちゃんへ会いにいきました。またしばらく会えなくなると思うと、少しさみしい気もちになりました。

「たいいんできて、よかったね。」  
と大きな声で言ったけど、やっぱり聞こえませんでした。

「またね。」  
と言って、あく手をした時、心が通じ合えた気がして、とてもうれしかったです。